

蘭学史に於ける人文科学の立場

著者	板沢 武雄
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政大學史學會々報
巻	5
ページ	3-5
発行年	1953-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/9701

蘭学史に於ける人文科学の立場

板 沢 武 雄

蘭学とはオランダ人及びオランダ語を通じて受容し、日本において日本人が研究発展させた西洋の学問、技術、思想等をひつくるめて呼ぶ名称で、その内容から大別すれば、一は研究の基礎となつたオランダ語学、二は医学本草学系統の学問、三は天文学曆学系統の学問、四は地理学、歴史学系統の学問、五は兵学造兵技術系統の学問、六は物理学、化学系統の学問で、所謂人文科学系統の学問は殆んど本格的な研究がなされなかつたといつてよい。このことはキリスト教の禁制を中核とした鎖国政策の下にあつては西洋の人文科学にふれることがタブーであつたこと、すべて新しいものを危険視する封建政治理念と機構、物質文明においては西洋の優越を認めながら精神文明においては東洋の優越を信奉する儒教的な固陋さと、そこから発する思想の抑圧、蘭学者自身の教養の基盤が儒教的東洋的で西洋の人文科学を受容するまでに自覚成熟を遂げていなかつたこと、貿易の実利に専念して国際的紛争を極度に警戒したオランダ人が日本の鎖国政策を神経質に遵守順応したから危険と思われる学問の輸入などという冒険を敢てしなかつたこと等いろいろな事情を考へることが出来よう、しかしわれ

われは鎖国体制下の日本における人文科学への関心とその芽生えを軽視してはならない。それは蘭学史のプランクを埋める学問的な仕事であると共に、明治文化との関聯において是非とも顧みなければならぬ国史学上の一問題であると思う。

今から九〇年前徳川幕府はオランダに一隻の軍艦を注文し、その機会に海軍に関する諸技術の伝習のために一団の人員を派遣した。そのうち今日特に問題にしたいのは菑書調所から派遣された津田真一郎と西周助の二人である。この一行がロッテルダムに到着したのは、一八六三年六月四日(文久三年四月十八日)であつたが、到着後八日に西周助が彼等の留学の世話掛でライデン大学の日本学教授であつたホフマン J. J. Hofmann に宛てた蘭文の書簡がこの二人の直接の教授となつたフィセリング S. Vissering 家に残つている。これを全文左に訳出する。

下名は、ここに以下の陳述をなす自由を有する。前年わが海軍当局が日本駐割和蘭総領事との間に、オランダにおいて一隻の船を建造することと、それがためにわが海軍士官等を和蘭へ派遣することを契約した。これについてわが菑書調所 *Emperiale*

school van Europeesche Wetenschappen においても我々二名の者を海軍司令官内田恒次郎に配属せしめることとなつた。その目的はわが国政府は帝國とヨーロッパ諸国との間には唯一つのオランダ東印度会社との関係があるばかりであつたが、七年前より歐洲の若干の國々と修好条約を締結するに至り、外交通商のいよいよ増加するに従つて、日本政府も亦わが國にヨーロッパの學術を移入することに必要を感じて江戸に學校を設立し、諸藩より教師を選任してその教師となし、いろいろな學問を教授させている。けれどもその學校の設備及び教授法において、なお幾多の不備欠陥を有し、學問も物理学 Naturkunde 数学 Wiskunde. 化学 Scheikunde. 植物学 Botanica. 地理学 Aardrijkskunde. 歴史学 Geschiedenis 及び蘭、獨、英、仏の四外國語をたゞ讀んだり理解する有様である。ヨーロッパ諸國との關係において、また内政及び施設の改良を行うために、より必要な學問及び統計 Statistiek. 法律 Reetsgeleerdheid. 經濟 Economie. 政治 Politiek. 外交 Diplomatie 等の學問は全然されていなく。

それ故にわれわれの目的は、これ等一切の學問を學ぶにある。僅かな滞在の中に、このように多くの、そしてそのように大切な事柄を全部學ぶことは実は不可能なことであるから、これ等の諸學科を一章一章順序たてて學ぶことは、今後第二回に派遣される若い學生にやらせることとして、私の計画はそれ等の要領をかいつまんで學ぼうと思ふ。私の貴下に希望することは、以上のことを承認せられて、私に一人の良師を選んでいただくことである。フランス語は各種の學問上非常に大きな役割を

演じているが、これを話すことはわれわれには甚だ困難で、これを流暢に話すものは甚だ稀である。私は時間の許す限りこれも學びたいと思ふ。私は既に英語を學び讀んだり理解することが出来るが、會話は出来ない。

右の外哲學 Philosophie と稱せられる方面の學問の領域も修めたいと思ふ。わが國法の禁じている宗教思想は、Descartes, Locke, Hegel, Kant 等の唱道したところとは相違していると思うからこれ等も學びたいと思ふ。この仕事は困難ではあるが、しかし私考えるに、これ等の學問の研究は、わが國の文化の向上に役立つところ少なくないと思ふから、短い期間のこととて恐らくはむずかしいであろうが、この一端なりとも學びたいと思ふ。

私はヨーロッパの習慣については全く知らないから、好意ある忠告によるにあらざれば自分で何も決することが出来ないことを自ら承知している。切に貴下の思慮ある助言を希望する次第である。

鄭重と敬意とを以つて

貴下の下僕 西 周助

Nisi Siioesake

この西周助の書翰は、当時日本人のもつていた所謂蘭學とは如何なる内容と程度のものであつたか、またおぼろげながら人文科學について、どの程度の関心または憧憬をもつていたか、またはどの程度にその方面の學問の必要を感じていたかを知ることが出来る。兎に角日本人が正式に西洋の人文科學を學んだのは、一八六三年六月以降オランダのライデンにおいてフィセリング博士に

就いて学んだ西周助と津田真一郎二氏にはじまることは正しい。

さて西、津田の以前に西洋の人文科学がどんな風には日本人に影響したか、または管見されたか。思うに直接且つ公には西洋の自然科学のみが受容されたのであるが、それによつて合理性を尙び、実験実証を尊長する学風が蘭学者やそれにつながる少数な日本人を啓発した。それから宇田川榕庵の植学啓原(天保五年)に默多徳 メーデー methode の一節があり、同書学原の章には学問の体係が説いてある。また同じく榕庵の舍密開宗(天保十年)には化学史の大綱が記されている。このようにして、西洋の学問の方法体系学史を知つたことは自然科学方面ばかりでなく、人文科学方面にも日本人を啓発し関心を喚起したに相違ない。殊に天文学書にはその学問の性質上、また發達上哲学との関係が深いので西洋哲学の大きな流れは、天文学書に親んだ人には一通り知られていたに相違ない。

私の管見によれば天保六年(一八三五)に草した高野長英の聞見漫

録が、日本人の手による恐らく最も早く最もまとまつた西洋哲学史の大綱といつてよからう。Thales から Desartes, Wolff までの西洋哲学史を比較的要領よくまとめている。これによつて、われわれはおぼろげではあるが西洋人文科学受容の程度を知ることが出来る。

しかし何といつてもキリスト教の禁制という徳川政権の国策は西洋の人文科学受容を阻止した決定的条件であつた。そしてこの制約が蘭学者の精神と学問の自由な發展を公の權威をもつて押しつぶした。蘭学者の中でも第一級に位置づけられる梅里杉田成卿は酒を飲むと「フレイヘイト／＼」と連呼したという。フレイヘイト Vriheid は自由である。封建制下に自由を抑圧されていた蘭学者の悲痛な叫びを聞く。「里はまだ夜深し富士の朝ぼらけ」と伊豆並山にいた江川太郎左衛門も嘆ぜざるをえなかつた。

以上のような諸条件、情勢のもとに、われわれは蘭学史における人文科学の立場を理解しなければならないのである。